

## まえがき

国際基督教大学の日本語教育は本年（1993年）40周年を迎えた。そこでセンターと日本語教育プログラム（JLP）は記念行事「ICU 日本語教育 40 周年記念研究会」を計画し、1994年3月26日シンポジウム「初級教材の課題」、研究発表（6テーマ）、講演「日本語教育の将来」を共催で行った。

この祝賀行事は単に国際基督教大学にとって40周年というにとどまらず、日本の大学で初めて単位を与えて教育した日本語教育が40周年を迎えたという大きな意義を持っている。小出詞子教授は30周年記念の講演「ICU 日本語教育の30年」の中で、正規の学生（留学生）が4年間で卒業しなければならないという制約のため、まず集中日本語（Intensive Japanese）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを1年目に、さらに半年の上級日本語（Advanced Japanese）Ⅰ、Ⅱを2年目という、1年半の課程を紹介している。

それから10年、日本語教育界も大きく様変わりし、経験重視の指導法から、教育理論に裏付けられた指導法が求められるようになった。日本語教師も国際化社会にともなう外国人との異文化接触により、価値観の多様性に対応しなければならなくなった。いいかえれば、新しい視点からの日本語教育学の構築が求められているのである。

国際基督教大学の日本語教育センターもこの事態に対応して、研究面では質の向上をはかり、「紀要」編集委員会を設け、投稿規定を定めた。本号掲載の論文は、高校留学生から大学生対象まで、また関連する日本語学・日本文学の論文もあわせて7編を載せることができた。

教育面では、1993年7月5日から8月14日までの期間に「夏期日本語教育」を実施した。そのとき使用した教科書「ICU 初級日本語」は、ここ数年改訂してきた教科書の総まとめであった。この成果を発表する機会として40周年記念研究会のシンポジウム「初級教材の課題」がとりあげられたのである。

本紀要3号は、紙面の体裁を改めた。編集は飛田良文・鈴木庸子・山下早代子が担当した。

1994. 3. 31

日本語教育研究センター長 飛田 良文